

新ヴィヴァルディ合奏団

ディヴェルティメント ニ長調 K.136モーツァルト

アイネ・クライネ・ナハトムジーク K.525モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲集《四季》ヴィヴァルディ

春

2004 四季コンサート

2004年4月9日(金) 6:45PM

会場: 浜松市教育文化会館

主催: 浜松音楽友の会

プロフィール

1979年指揮者の早川正昭とソリスト級の演奏家たちによって結成された。全員がゲルネリをはじめとした名器を使用し、音色の美しさと緻密なアンサンブルには定評がある。レパートリーはバロック時代の作品の他、古典作品から現代作品に至るまで幅広く、また民謡やポピュラー・ナンバーを加えたものや、早川正昭によって作られたバロック風「日本の四季」等、非常に多彩である。

早川正昭(指揮)

1956年東京大学卒業。1960年東京芸術大学作曲家卒業。指揮を渡邊暁雄氏に師事。翌年東京ヴィヴァルディ合奏団を創設。数回にわたる海外演奏旅行で、自作曲等が国際的に認められ、1973年武井賞を受賞。1978年文化庁在外研修員として渡欧。バロック音楽と古典舞踊について学んだ。帰国後新ヴィヴァルディ合奏団の指揮者を務める。作曲作品も多数あり、海外で出版・演奏される機会が多い。現在、新ヴィヴァルディ合奏団常任指揮者、広島大学名誉教授。

内田 輝(コンサートマスター)

東京芸術大学卒業。1972年よりヴィヴァルディ合奏団の一員として参加。1977年よりゾーリング市立響コンサートマスターに就任。帰国後、在京オーケストラのゲスト・コンサートマスターや、室内楽奏者、ソリストとしても活躍。現在、新ヴィヴァルディ合奏団コンサートマスター、北海道教育大学教授。

新ヴィヴァルディ合奏団



NEW VIVALDI ENSEMBLE
OF TOKYO CONCERT

●モーツァルト／ディヴェルティメント 二長調 K.136

モーツァルト (1756～1791) の父レオポルド (1719～1787) は、幼い息子の神童ぶりを広く披露しようとヨーロッパ中で演奏旅行を試み、各国の王宮で御前演奏などを続けた。このディヴェルティメントが作曲されたのは、2回目のイタリア旅行からザルツブルクに帰っていた1772年始めと考えられている。この頃はしばらく故郷を離れず、落ち着いて作曲に専念した時期でもある。イタリア語の「楽しませる」に由来するディヴェルティメントは、モーツァルト作品を代表するジャンルのひとつであり、この「二長調」と同時に「変ロ長調」、「ヘ長調」の3曲を作曲しているが、いずれも当初は弦楽五重奏のために書かれた。この作品はイタリア的な明るく華やかな風趣を有し、数あるモーツァルトのディヴェルティメントの中でも取り分け愛好されている。

第1楽章 アレグロ 二長調 ソナタ形式

極めて印象的な第1主題に象徴される快活で生き生きとした楽章。

第2楽章 アンダンテ ト長調

おおらかな楽章でゆったりとしたイタリア的気分に溢れている。

第3楽章 プレスト 二長調 ロンド・ソナタ形式

軽やかに飛び跳ねる音型から開始され、ロンドのリズムに終始している。M・ハイドンの影響も見られる。

●モーツァルト／アイネ・クライネ・ナハトムジーク K.525

モーツァルトの作品というよりも、世界中の曲のなかで最も親しまれている曲のひとつである。ウィーンに定住していた1784年から書き始められ、歌劇《ドン・ジョヴァンニ》第2幕の作曲に取り掛かっていた87年8月に完成された。この楽曲タイトルは、モーツァルト自身が作成した目録にも記されており、「小セレナード」といった意味。何らかの機会のために作曲されたことは明らかだが、その経緯はわかっていない。

第1楽章 アレグロ ト長調 ソナタ形式

あまりにも有名な力強い第1主題から開始されるが、分散和音を素材とした前半部分と、軽やかで華やかなトリルを用いた後半との好対照を見せている。

第2楽章 ロマンツェ アンダンテ ハ長調 三部形式

表題通り抒情に溢れた楽章で、主要主題が何度も再現されるという形をとる。中間部はハ短調で書かれ、内声による瀟洒な対話がいかにもモーツァルトらしい。

第3楽章 メヌエット アレグレット ト長調

堂々と開始される主題を持つこのメヌエットは、これ自体で演奏される機会も多い。続くトリオは歌謡性豊かな旋律が美しい。

第4楽章 ロンド アレグロ ト長調

躍動感に富む主題を持つ活発なフィナーレ。颯爽とした風趣を残しながら見事なクライマックスを迎える。

●ヴィヴァルディ／ヴァイオリン協奏曲集《四季》

ヴィヴァルディ (1678～1741) は、ヴェネツィアに生まれた作曲家である。カトリック教会の聖職者として、女子養育院などで音楽訓練を施すため多くの楽曲を書いた。その髪の色から「赤毛の司祭」とも呼ばれていたが、バロック協奏曲の基盤を築き、ヴァイオリン奏法を進歩させた功績は大きい。

《四季》の4曲は、全12曲からなる協奏曲集「和声と創意への試み」作品8の第1番から第4番。協奏曲を標題音楽とした初例であり、《四季》ばかりではなく他の第5番《海の嵐》や第10番《狩》なども広く親しまれている。おおよそヴィヴァルディ50歳頃の作品と推定され、それぞれが3楽章の協奏曲形式で独奏ヴァイオリンと通奏低音（オルガンもしくはチェンバロ）を含む弦5部のために書かれている。さらにソネット（情景や気分を表した14行からなる叙情詩）に忠実に音楽を付けて描写しており、このソネットは作曲者自身が書いたとも推考されている。

〈春〉緑を連想させる曲調が、躍動する生命力を表している。

第1楽章 アレグロ ホ長調

第2楽章 ラルゴ 嬰ハ短調

第3楽章 「田園舞曲」ホ短調

〈夏〉焼けつく太陽、けだるい午後の気分。

第1楽章 アレグロ・ノン・モルト ト短調

第2楽章 アダージョ ト短調

第3楽章 プレスト ト短調

〈秋〉収穫を喜び、祭りに踊り、祝杯をあげる農民たち、そして狩。

第1楽章 アレグロ ヘ長調

第2楽章 アダージョ・モルト 二短調

第3楽章 アレグロ ヘ長調

〈冬〉激しく吹き荒れる雪と風、家の暖かな暖炉、氷の上の足取り。

第1楽章 アレグロ・ノン・モルト ヘ短調

第2楽章 ラルゴ 変ホ長調

第3楽章 アレグロ ヘ短調